

安全で安心な未来をつくるために

安全？
安心？
街中にあふれている
言葉ね！
そう言わないといけ
ない社会なの？



大橋 智 樹

宮城学院女子大学

心理行動科学科教授

はじめに

「安全」・「安心」という二つの言葉を目にしない日はない
そう断言できるほど、社会にはこの二つの言葉があふれています。スーパーに行けば「安



宮城学院女子大学 心理行動科学科 教授
文学博士 臨床心理士

■1971年東京都生まれ。東北大学大学院文学研究科修了。財団法人学術振興会・特別研究員（PD）、（株）原子力安全システム研究所ヒューマンファクター研究プロジェクト研究員を経て、2002年より現職。社団法人日本工学会アカデミー安全知の連合委員会委員。

■専門分野は、産業・経営心理学、人間工学。

■主な著書は、『安心の探究—安全の人間科学21世紀の課題』プレジデント社、『事例に学ぶヒューマンエラー—そのメカニズムと安全対策』麗澤大学出版会

全・安心な食品を提供します」といった言葉が並び、街角には「安全・安心街作り宣言」などの看板が立ち、病院でも「患者様に安心していただく安全な医療を」などという標語を目にしますし、インターネット接続で

は「安全・安心マーク」なるものまで作られてもいます……

こんなに頻繁に目にする言葉は、この他には「環境」とか「エコ」くらいなものではないでしょうか。

年末恒例のイベントともなっ



塗装は人や動物に優しい、安心安全塗料だと言うけれど…。

本当に「安全」なの？

生産履歴情報・トレーサビリティのある食品を並べ、安心・安全を買う時代ですか？



てきた「流行語大賞」や「今年の漢字」を引くまでもなく、言葉は世相を反映する

ものです。街に氾濫する言葉は、世相、すなわち、現代の社会の姿を映す鏡であるといえます。社会の姿は、個人の姿の集合体であり、したがって、一人一人の心の集まりであるわけです。このように

考えると、「安全」や「安心」という言葉があふれる現代の社会では、一人ひとりの心がそれらを求めていると言えるかもしれません。

私は大学で心理学を教え、人の心についての研究をしています。本稿では、その立場から、「安全」と「安心」があふれる社会を考えてみたいと思います。安全で安心な未来をつくるためにはどうしたらよいか、

その小さなきっかけになれば幸いです。

心理学とは

「いま私が何を考えているか、わかっちゃうんでしょね」初対面の人に、大学で心理学を教えていると言うと、たいていはこんな反応が返ってきます。心理学＝心を読む学問、あるいは、心理学者＝カウンセラーといったイメージが一般的なようです。安全と安心についての話を進める前に、まずは、心理学という学問についての誤解を解いておきたいと思います。

少なくとも私は人の心を読めませんし、そして、心理学は心を読むことを目的にした学問ではないと思っています。では、どんな学問か。この問いに答えるためには、まず、「心」がどんなものかを考えねばなりません。このことを考えておくことは、実は、安全や安心を考える

際にとっても重要なのです。

心について確実に言えることは、心は一度たりとも目撃されたことがないという歴然とした事実です。幽霊だって、UFOだって、ツチノコだって目撃例や写真があるのに、心にはそれが一つもない。心とはそれほどに実体のない存在なのです。

では、心理学はなぜ、実体がない心という対象を研究対象として扱えるのでしょうか。その理由は、心理学が、心と密接に関連があつて、かつ、確実に実体のある「行動」を直接の研究対象としているからなのです。

つまり、心理学は、「心は行動の背後に存在する」「行動は心の現れである」という前提に立って、その行動を客観的に測定することで、間接的に心を研究している学問なのです。

こう考えていくと、心理学は行動を測定する科学であると言えるでしょう。縮めて「行動測定科学」。私の造語ですが、こ

れが私流の心理学の解釈です。こう聞けば、「心を読んでいる」という誤解のかなりの部分は、解けるのではないでしょうか。

安全とは？安心とは？

心理学と心理学者について少しご理解いただいた上で、本題に入りましょう。安全とは？安心とは？という問いの答えを心理学者である私が探してみます。

実はこの問いの答えは国が出してくれています。いまからちょうど五年前に文部科学省が「安全・安心な社会の構築に資する科学技術政策に関する懇談会」報告書」をまとめています。この中で、安全も安心も定義されています。

安全…(人や物に)損害がないと客観的に判断されること。

安心…個人の主観的な判断に大きく依存する。たとえば、予測している状況と大きく異なる

状況にならないと信じていること、など。

文章はだいたい省略しましたが、内容はこんな感じですよ。おざっぱに言ってしまうと、安全は客観的なもので、安心は主観的なものである、という定義です。このような定義は政府の懇談会だけでなく、安全や安心に関わる研究者、現場での実践者など、多くの方々が一般的に持っている定義であると言ってよいでしょう。

私は、この定義、特に、安全に関する定義は間違っていると考えています。そして、安全で安心な未来を目指す上で、この間違いは致命的な障害になると思います。どこが致命的なのでしょう？

結論から言ってしまうと、安全は決して客観的なものではありません。実は、安全も非常に主観的なものなのです。その理由をお話ししましょう。

私は安全を「危険の存在が許

容できる程度に小さい状態」と定義しています。つまり、危険の存在を前提として、それが十分に低められている状態ということですよ。

たとえば、猛毒をもつヘビが分厚いガラスのケースの中に入れて目の前に置かれる。そんな状態です。

ヘビの猛毒という危険はすぐ目の前に存在しますが、しかし「分厚いガラスのケース」という壁によって猛毒にさらされる危険は十分に低いと考えられます。したがって、安全なのです。

しかし、これでも安全だと思わない人はいるでしょう。ガラスが突然割れたら…とか、ふたが開いてしまったら…とか。可能性としてそれらはゼロではありません。そうなるかもしれません。壁がなくなり、危険性は一

猛毒を持っていますが、分厚いガラスケースに入っています



気に高まります。

つまり、問題は、許容できる程度に、という部分にあるのです。安全だと考える人と安全だと考えない人がなぜ生まれるのかと言えば、許容範囲が人によって大きく異なるからです。許容範囲はその人の考え方や、その人の経験などに基づいて決められ、どこかに主観的線引きがおこなわれるのです。

たとえば原子力発電所の安全性について、同じ客観的事実に基づいて議論をしても結論が分



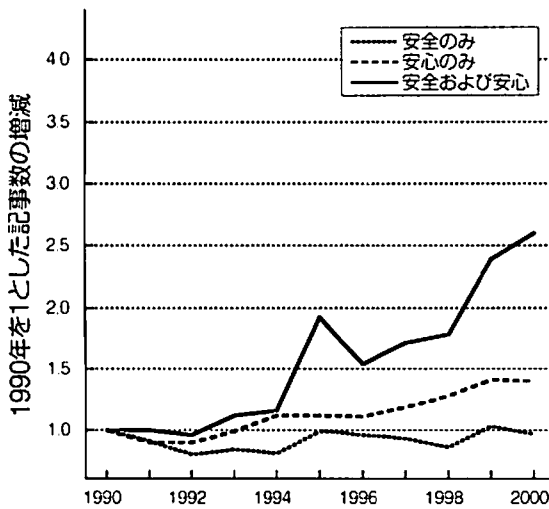
かれることが多いのは、この、主観的線引き、の役割が大きいからです。

厳格に考えれば、動物園なんて危険の宝庫ですよ。ライオンがいて、ゾウがいて、毒ヘビがいて……なぜ、そんな場所に子どもを連れて行けるか。それ

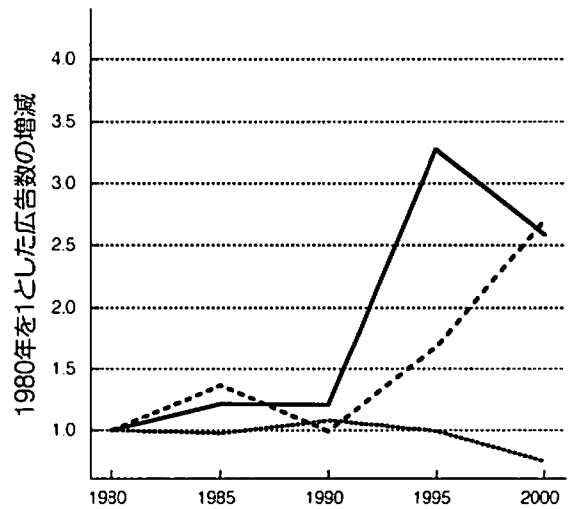
はひとえに、危険が十分に低められていると信じているか、あるいは、危険が存在することすら考えていないか、のどちらかです。

ここで、大事なことは二つあります。一つは、危険は常に存在するということです。もう一つは、安全は客

観的に決められるものではないということですよ。一つ目は一般の方が誤解しがちな問題で、二つ目は専門家と言われる人たちが勘違いしがちな問題です。この二つの大事なことがきちんと理解されないとどうなるでしょう。まず、一般の方に「危険をゼロに



左図：新聞記事にみる安全と安心の変化



右図：新聞広告にみる安全と安心の変化

して欲しい」という達成不可能な要求が生まれてしまいます。

動物園を安全と考えるのと同じレベルで、原子力発電や遺伝子組み換え食物、最先端の医療技術などの高度な科学技術に対しても、ある程度の危険性を許容しなければなりません。これは現代に生きる人間としての責務だと思います。

一方、専門家と言われる人たちは、安全が客観的に定められると思いがちです。もう少し正しく言えば、専門家の立場で引いた境界線が安全かどうかを判断する唯一の解であり、それ以下の危険は誰もが許容すべきであると考えられる傾向にあります。

たとえば、新たな科学技術の地域への導入（たとえば焼却炉や火葬場を新たに建てるとか）について一般の人と専門家とが話し合いをする際に問題となるのは、まさにこの点なのです。危険がゼロであることが安全であると考える人と、自分の基準

で安全を決めてしまう人とが話し合っても、平行線なのは明らかです。

ですから、最初に申し上げたとおり、安全とは何か？という問いにしっかりと向き合い、答えを出すことから始めないと、「安全で安心できる社会」なんて実現できないだろうなあと私は思うのです。

安全を安心に結ぶ

前の項では安全と安心はどちらも主観的なものであるという私の考えをお話ししました。次に、安全を安心に結びつけるためにはどうしたらよいか、を考えてみたいと思います。

実は、安全と安心とを結びつける試みは、そう古いものではありません。その根拠は、「新聞記事」と「新聞広告」にあります。どちらも私たちが調べたものですが、まずはグラフを見てください。



右下のグラフが新聞記事のデータベースを使って一九九〇年から二〇〇〇年までの記事を検索したもので（朝日、毎日、読売、産経）、右側が新聞の縮刷版から新聞広告を丹念に拾い出して自前のデータベースを作って一九九〇年から二〇〇〇年までの新聞広告を検索したものです（朝日、日経）。どちら

も、「安全のみを含むもの」「安心のみを含むもの」「安全と安心のどちらも含むもの」の三つで調べました。新聞記事は一九九〇年の記事数を一として一年ごとに、新聞広告は一九八〇年の広告数を一として五年ごとに表示してあります。

新聞記事では一九九〇年を一とすると、安全のみ、または安心のみを含む記事はほぼ横ばいですが、安全と安心の両方を含む記事は十年で二・五倍以上に増えたことがわかります。

特に、一九九五年からの伸びが急激です。一方、新聞広告では一九八〇年を一とすると、安全のみが微減、安心のみ、安全と安心はいずれも二・五倍を少し超えるくらいの伸びを示しています。いずれのグラフでも注目すべきは一九九五年に大きな変化を示しているということ。この年に何があったか、思い出せますか？

この年は、一月に阪神・淡路大震災、三月に地下鉄サリン事件が起こりました。いずれも、誰もが予測をしていなかった未曾有の大惨事となり、日本の安全神話が根底から覆された年なのです。時期を同じくして、安心というキーワードを含む広告が増え、安全と安心の両方を含

む記事と広告が増えたことになり
ます。二つの大惨事とこの変
化はリンクしていると考えるの
は自然でしょう。

さて、このように十年ちよつ
と前に「合体」することになっ
た安全と安心ですが、その合体
は言葉の上だけのようです。実
際には、安全を訴えても安心を
得られないことが多いというの
が実体でしょう。その理由を少
し考えてみたいと思います。

安心⇨安全+信頼?

安全と安心の関係では、「安
心⇨安全+信頼」といった主張
をよく見ます。最初にご紹介し
た文科省の報告書でもこのよう
な構図を描いています。安全を
訴えている人や組織に対する
「信頼」が、メッセージの信びよ
う性を高め、やがて安心を生む。
こういう考え方でしよう。



一九九五年に何があつたがしら?
阪神・淡路大震災と地下鉄サリン事件が
起こつたなあ

私は、この考え方は安全を
安心に結びつけ
られないと考え
ています。この
考え方には足り
ないものがある
のです。それは
「疑いをもたな
いこと」です。
たとえば、あ
なたが鉄道を安
心して利用して
いるとして、駅
のホームに並ん

でいるとき、後ろに立つ人はあ
なたをホームから突き落とすよ
うな人ではないと「信頼」して
いますか?

いや違うと思います。突き落
とされるなんてことは、そもそ
も考えていないのです。

信頼とはまず何らかの疑いが
存在していて、しかし何らかの
根拠に基づいて大丈夫だろうと
わざわざ「判断」すること
です。しかし、すべてにそのよう
な判断をしているわけはありま
せん。むしろ、多くの事柄に対
して人は、疑いすらもたないの
です。

安全に基づく安心には、この
ような「疑いすらもたない」状
態が必須だと私は思っていま
す。信頼という「判断を強いら
れる状態」だけでは安心は生ま
れません。誰かに安心してもら
いたいと望むなら、「疑いすら
もたれない」ために何をしたら
いいかを考えるべきなのかもし
れません。

それは少なくとも、「発生確
率が十の何乗分の一」といった
数字でもなければ、「科学的に
正しい結論」という論理でもな
いでしよう。

それが何であるかについて、
完璧な結論を出すのは私の仕事
ではありません。安全で安心な
未来をつくりあげたいと思うす
べての人々が、それぞれ一生懸
命考えて見つけていくことなの
です。



あなた!
「疑いすらもたない」
「疑いすらもたれない」
関係でいきましょうね。
そうだねえ